山溪ノンフィクション・ブックス
女たちの山
シシャパンマに挑んだ女子隊9人の決算……
落合誓子

著者略歴

1946年　石川県に生まれる
1967年　京都女子大学短期大学部卒
1970年　松下電器産業株式会社入社
1975年　フリーライターとなる
著書『貴族の死滅する日』
　　『男と女の昔ばなし』

女たちの山

シシャパンマに挑んだ女子隊9人の決算

定価＝九八〇円

昭和57年12月10日　第1刷発行

著　者　落合誓子
発行者　川崎吉光
発行所　株式会社　山と溪谷社
東京都港区芝大門一-一-三三
郵便番号　一〇五
電話　東京(03)四三六-四〇二一(代)
振替　東京八-六〇二四九
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社　若林製本工場

©落合誓子　一九八二年　Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

8521
ISBN4-635-04136-0

山溪ノンフィクション・ブックス

女たちの山

シシャパンマに挑んだ女子隊9人の決算

落合誓子

カバー・写真＝北村節子
ブック・デザイン＝井上敏雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

*目次

プロローグ・氷雪の墓標――9
1――冷めた例会――21
2――見のがした分岐点――47
3――前進と撤退と――85
4――潜行した違和感――117

5 消去法による決断 181
6 たったひとりの登頂 199
7 女たちの決算 233
エピローグ・軍国の母と女将校 271
あとがき 284

プロローグ
氷雪の墓標

彼女は窓の外を先ほどから、もうどれだけ見つめていることだろうか。つぎつぎと移りゆく、単調な風景。しかし彼女の目にはほとんど何も映ってはいなかった。

永沼雅子は名古屋から東京へ帰るところだった。激しい痙攣の後遺症なのか、まだしびれの残っている手。抑えようのない不安がつぎからつぎへと彼女を襲ってくる。

彼女はその日、その年（一九八一）三月中旬に日本を出発する予定の「シシャパンマ日本女子登山隊」の中国遠征に参加する隊員のひとりとして、名古屋大学の低圧実験室へ行った帰りだった。登山は、当たりまえのことだが一歩登るごとに高度が上がる。高度が上

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

がれば確実に気圧は下がり、酸素が薄くなる。登山者はあらゆる登山技術の前に、まずこの環境の変化に体を順応させなければならない。

名古屋大学には環境医学研究所があり、そこの低圧実験室は人工的に低圧、低酸素の環境を準備することによって、登山予定者にあらかじめ高度体験をさせ、同時に、さまざまな高度における人体の変化を調べようという、いわば研究と登山者の高所訓練を兼ねた施設として海外遠征に出かける登山隊の協力を求めていた。永沼の属する、田部井淳子を隊長とするシシャパンマ日本女子登山隊も隊をあげて協力しており、永沼もこの実験は初めての体験ではなかった。

外部と全く遮断された、いわばエレベーターのような箱に入れられる。少しずつ、少しずつ酸素の濃度が下げられ、気圧が下げられていく。

「高度二〇〇〇メートルです」

「高度三〇〇〇メートルです」

ときおり、高度を知らせる声が外から聞こえるほかは何事もなく時が過ぎてゆく。気分はすこぶるいい。高度による思考力や注意力の変化を調べようというのだろう。手もとには実験用のテストが配られている。見覚えのある実験室。その中で永沼はときどき深呼吸をしながら、目だけは問題を追う。いつもと同じ雰囲気である。彼女はもう一カ月後に迫

った出発をいやがうえにも実感させられて、まだやり残した準備がときどきチラチラと頭の中をかすめるのであった。

世界の山は八千メートル級が最高峰である。したがって、海外の山に野心を持つ登山家にとってはその下の七千メートルがひとつの関門であるという。七千メートルを超える体験を経ると登山家はひと回り大きく成長すると言われている。富士山よりも高い山には登れない日本のクライマーたちは海外登山で、まず七千を超えることを第一の目標に置く。

その重要なポイントである「高度七〇〇〇メートル」にあと一歩を知らせる声が聞こえた直後のことであった。永沼雅子は突然、手足にしびれを覚えた。「あれ?」と思って手を握ったり広げたりして感触を確かめようとする間もなく、手足が硬直して動かない。開いたままの手はまるで枯れ木のように茶褐色に見える。彼女は驚いた。酸素マスクを引き寄せて横になるのが精いっぱい、しかし意識ははっきりしている。胸もとに点灯している心電図のランプを見つめながら、彼女は自分の異常を外に告げた。

「心臓に、心臓に異常はありませんか?」

「別に異常はありません。しかしこのまま高度を上げつづけることは危険です。少しずつゆっくり下げていきます。そのまま横になっていてください」

それはほんとうに突然やってきた。彼女は以前のエベレスト遠征で、すでに七四〇〇メ

ートルの高度を実際に体験している。低圧実験室も今度の遠征が計画されてからでさえ、もう二度目である。いずれもこれといった症状は出ていない。時間が経過するにしたがって、体がもとに戻ってくるのを実感しながら、彼女は外へ出るのを待ち切れずに聞いた。胸の中には言いようのない不安が渦巻いている。

「原因はなんでしょうか」

「血管か神経か……それとも血液のいずれかだと思いますが、ここでは判断できません。くわしい検査をしてください。もちろん高度が要因です」

明らかに高度障害だと思われる。いわば高山病の強度なものだ。日本の山は三千メートル程度だから、高山病という表現が最もふさわしく、軽い頭痛と耳鳴り、ひどいときには吐きけが伴うぐらいですむが、五千メートル以上の山になると、高山病と呼べるようなそんななまやさしいものではない。

私たちの体は一気圧という環境にすっかりなれている。それが、たとえば五千メートルで酸素の量が半分で気圧も二分の一という状態になる。それから上昇するごとに、さらに気圧は下がり、酸素も薄くなっていく。登山というのはそんな中で、激しい運動を伴う生活を長時間つづけるのだから、人体に与える影響は計り知れない。全くの健康体の人でもさまざまな症状が出てくる。眼底出血、むくみ、脈搏不整、血圧の上昇、呼吸困難、それ

らに加えて思考障害や性格の変化、味覚などの知覚障害など、その人の人格に直接関係のある変化が表に出てくる場合も少なくない。

健康体で、しかも三千メートルぐらいの山なら何度も経験しているという国内のベテラン・クライマーでさえも、初めての海外遠征ではベース・キャンプにいるだけで体力を消耗するというほど、この高度障害を克服するのが登山者にとって大きな課題なのである。それが、もともと血圧や心電図に異常があったり、脳波に問題があったり、血管や血液に障害があったりした場合、高度でどういう状態になるかは予測できない。環境の悪さが、さまざまな内在している病気を誘発してしまうこともあり得る。

永沼の場合、高度を三千メートル台まで下げると症状は消えた。しかし専門医の診断を受けることを勧められてしまったのである。単なるしびれだけでなく硬直が伴うというのは何か病気が隠れている危険性もあるという。

新幹線のシートに体を沈めながら永沼雅子は動揺していた。もし岩場に取り付いているときに先ほどのようなことが起こったら、真っさかさまに滑落してしまうことは必定だ。自分ひとりならまだしも、ザイルを組んでいる仲間まで引きずってしまうことにでもなったらどうなるか。

いや、もし、ゆるやかな斜面であっても、体の自由のきかなくなった彼女を安全に下へ

降ろすために、何人もの仲間たちが登高を中断しなければならない。それは仲間たちにどれだけ重い負担をかけることになるかを、彼女がいちばんよく知っていた。

「それにしても……」

と彼女はつぶやいた。

彼女は四年前に、自分の夫をヒマラヤのダウラギリで亡くしていたのである。それも「高度障害」による事故だった。意識のなくなった彼女の夫をなんとか下へ降ろそうと、仲間たちの必死の作業も空しく夫は死亡した。

彼女も山に登る人間だ。送り出した以上、「万が一」という覚悟はあった。しかし事故が現実のものとなった時、夫を失った悲しみもさることながら、登山による事故がこんなにもいろいろなことを引き起こすとは考えてもみなかった。それ以来、彼女を襲ったさまざまな生活の変化に翻弄されつづけ、最近ようやく立ち直ったばかりだったのである。

「火葬証明」のない夫の戸籍を抹消してもらうだけでも、たいへんな仕事だった。区役所の窓口の応対も威圧的で世話をやいてくれた仲間たちを憤慨させた。ネパール大使館発信の弔電を和訳して、内容に偽りがない由の和訳証明を添付して窓口へ提出させられる。それが確かに死亡したという証拠になるらしい。その間何度もネパール大使館と手紙のやり

とりがあり、その返事が行き違ったり、手続きがうまくいかなかったり。そのたびに夫の山友だちが世話をやいてくれた。

夫を山で死なせた嫁として、彼女が夫の家族から受けた無言の圧力も思い出したくないもののひとつだった。

「なぜ女のあなたが止めなかったのか……」

そんな夫の家族の無言の非難を背中に、彼女はただ黙って耐えるしかなかった。

しかし彼女は夫を亡くしたからといって、山をやめようなどとは思ったことはなかった。夫の好きだった山に登りつづけることはむしろ夫の遺志を継ぐことだと思いはしても、登山そのものをやめることなど考えてもみなかったのだ。しかし……、彼女は今初めて登ることに言いようのない不安がわきあがってくるのをどうすることもできなかった。彼女は目を閉じた。つい先日正月休みを利用したカトマンズへのひとり旅を思い出していた。

彼女の夫は今もダウラギリの六六〇〇メートル地点に埋まっている。今回の中国登山隊に参加する前に、彼女はどうしても夫に会っておきたかった。特別感傷的な気持ちというわけではなかったが、夫の死後、初めて海外遠征に参加する彼女は、自分の気持ちを整理するためにも、もう一度夫に会っておきたかったのである。高度六六〇〇メートルのダウラギリの中腹まで、彼女ひとりで行けるはずはない。彼女は飛行機の窓に顔を押しつける

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co